第33回
読書感想文コンクール

作品集　２０１９

利尻富士町立鬼脇公民館

第三十三回　読書感想文コンクール作品集の発刊にあたって

利尻富士町教育委員会
教育長　島谷　一昭

この「読書感想文コンクール作品集」は、今年で三十三回目の発刊となりました。本年度のコンクールには、小学生九十編、中学生六十六編、合計百五十六編の応募をいただき、その中から優秀作などに輝いた作品三十一編を一冊にまとめました。

応募いただいた多くの作品には、それぞれ一冊の本を深く読んで感じたこと・思ったこと・連想したことを自分の言葉で力強く素直に表現しており、内容的にも優劣がつけがたいものです。

昨今、スマホやネットの普及は目覚ましく情報の入手が容易にできるようになり、子どもたちの読書離れ・活字離れは加速しているものと考えられます。このため、本町では「利尻富士町子ども読書プラン」により、子どもたちが読書に親しむ機会を得られるよう図書の充実や家庭・地域・関係団体の啓発活動を推進しています。その一環として、各学校においては、朝読書の時間帯に読み聞かせなどの習慣をつけることで、子どもたちがより一層本に親しめる機会を図っているところです。

一冊の本との出会いが、子どもたちの夢や希望を育み、想像力を豊かなものにし、健やかに育つための一助となります。ご家庭でもぜひ本に親しむ機会を持たせていただければ幸いです。今後もコンクールを通じて、より多くの子どもたちが読書好きになるよう、事業内容の充実を図るとともに、この作品集が、より多くのみなさまに読んでいただけることを願っています。

おわりに、時節柄公務ご多忙のなか審査に当たられた先生方をはじめ関係各位に心から感謝申し上げますとともに、今後とも多くの子どもたちの個性、可能性を引き出すため、読書活動の推進にご尽力いただきますようお願い申し上げ、発刊のことばといたします。

【作品集　目次】

小学校一学年の部

☆　優秀作

「まほうのゆうびんポスト」をよんで
鷲沼小学校　一年　もとじま　えいのすけ・・・６

★　佳　作

ゆうやけこやけぐるりんぱ
利尻小学校　一年　やまや　ことは　・・・６

「りんごがひとつ」をよんで
鷲沼小学校　一年　こくぶん　ななみ　・・・７

★　奨励賞

「しゅくだいクロール」をよんで
鷲沼小学校　一年　すだ　ひまり　・・・７

小学校二学年の部

☆　優秀作

イライラくんとこえだちゃん
利尻小学校　二年　大山（おおやま）　望叶（もか）　・・・８

★　佳　作

ライトきょうだい
鷲沼小学校　二年　大藪（おおやぶ）　優月（ゆづき）　・・・８

「そらとぶてっぱん」をよんで
利尻小学校　二年　川村（かわむら）　旭陽（あさひ）　・・・９

小学校三学年の部

☆ 優秀作

すごく大切なもの
鷲泊小学校 三年 中山 智晴（なかやま ともはる） ・・・ 10

★ 佳 作

「はやぶさ、あきらめない心」から学んだ三つの大切なこと
鷲泊小学校 三年 佐藤 周宥（さとう しゅうすけ） ・・・ 11

ちょっとだけ
利尻小学校 三年 加賀谷 美緒（かがや みお） ・・・ 11

小学校四学年の部

☆ 優秀作

「一つの花」を読んで
鷲泊小学校 四年 黒川 結凪（くろかわ ゆうな） ・・・ 12

★ 佳 作

こもり森のわすれなぐさ
利尻小学校 四年 澤田 奈実（さわだ なみ） ・・・ 13

「まあちゃん」を読んで
鷲泊小学校 四年 渡邊 彩奈（わたなべ あやな） ・・・ 14

★ 奨励賞

「かあちゃん取扱説明書」を読んで
鷲泊小学校 四年 天内 颯斗（あまない はやと） ・・・ 15

小学校五学年の部

☆ 優秀作

小公女　利尻小学校　五年　中田（なかた）　理央奈（りおな）　・・・16

★ 佳作

「種谷海璃、児童会長に立候補します！」　鴛泊小学校　五年　種谷（たねや）　海璃（みり）　・・・17

だれも知らない小さな国　利尻小学校　五年　河越（かわこし）　姫花（ひめか）　・・・18

★ 奨励賞

「許すということ」　鴛泊小学校　五年　酒井（さかい）　綾乃（あやの）　・・・19

小学校六学年の部

☆ 優秀作

「いのちの作文」を読んで　鴛泊小学校　六年　渡邊（わたなべ）　拓斗（たくと）　・・・20

★ 佳作

「海底二万マイル」を読んで　利尻小学校　六年　武田（たけだ）　龍太（りゅうた）　・・・21

「人狼サバイバル」を読んで　鴛泊小学校　六年　寺田（てらだ）　はな　・・・21

★ 奨励賞

シートン動物記マガモ親子の陸の旅　鴛泊小学校　六年　小神（こがみ）　天寧（あまね）　・・・22

中学校の部

☆ 優秀作

「ジャッジメント」を読んで
鴛泊中学校 二年 吉田 汐音（よしだ しおね） ・・・ 23

ひだまりに花の咲く
鬼脇中学校 一年 冨岡 小華（とみおか こはる） ・・・ 24

★ 佳作

「一人ぼっちの教室」
鴛泊中学校 一年 黒川 遥凪（くろかわ はるな） ・・・ 25

「下町ロケット」を読んで
鴛泊中学校 二年 亀田 七潤海（かめだ なずみ） ・・・ 26

「西の魔女が死んだ」を読んで
鬼脇中学校 二年 牧野 海結（まきの みゆ） ・・・ 27

「この世界の片隅で」を読んで
鬼脇中学校 三年 熊谷 宙大（くまがい ひろと） ・・・ 28

★ 奨励賞

「西の魔女が死んだ」を読んで
鴛泊中学校 二年 天内 陽向（あまない ひなた） ・・・ 29

「この本を読んで伝えたいこと」
鴛泊中学校 三年 髙橋 優羽（たかはし ゆう） ・・・ 30

「聲の形」を読んで
鬼脇中学校 二年 河越 苺夏（かわこし まいか） ・・・ 31

小学校一学年の部

☆ 優秀作

「まほうのゆうびんポスト」をよんで

おしどまり小学校　一年　もとじま　えいのすけ

ぼくがこのほんをよもうとおもったのは、しまもようのポストがきになったからです。そのしまもようのポストは、てんごくやおばけにもてがみがとどくまほうのポストでした。

けんとくんは、てんごくにいるおばあちゃんとごんたっていういぬにもてがみを、かきました。

どうぶつにもとどけてくれるから、すごいなっとおもいました。

ぼくは、もしにっぽんにまほうのポストがあったら、きんぎょにてがみをかいたいです。なぜなら、このまえきんぎょがしんでしまってかなしいからてがみにかきたいです。

＊こうひょう＊

本の内容がつたわるようにしっかりと書けていました。また、自分だったらだれに送るのかを考えるなど、本の世界から想像を広げている所がすばらしかったです。これからもたくさんの本に触れる中でさらに自分の世界を広げていってください。

★ 佳作

ゆうやけこやけぐるりんぱ

りしり小学校　一年　やまや　ことは

わたしが、このほんをえらんだのは、おもしろそうだからです。

とうじょうじんぶつは、おんなのこ、るなちゃん、おかあさんです。

ないようは、五じにかえれなかったけど、いいけしきがみられてよかったおはなしです。

おもしろいのは、おかあさんにおこられても、しんぶんいれからさけんで、はいれるところです。

ともだちがいじわるでも、やさしくしてあげて、いちばんぼしがみられてよかったとおもいました。

わたしも、みんなにやさしくしてあげたいです。

＊こうひょう＊

本の中で感じたやさしさから、自分をふりかえることができたのはとてもすてきなことだと思います。やさしさを感じた場面をもっとくわしくしょうかいできると読む人にも伝わりやすいと思います。来年の感想文も楽しみにしています。

★ 佳作

「りんごがひとつ」をよんで

おしどまり小学校　一年　こくぶん　ななみ

わたしはこのほんがだいすきなので、りんごがひとつをえらびました。おなかをすかせたどうぶつたちが、一つのりんごをみつけて、みんなほしがっていました。

みんなほしいのに、おさるさんはりんごをとってにげていきました。どうぶつたちはみんなおこりました。わたしも、おさるがかってにりんごをとってにげたのは、だめだなぁとおもいました。

でも、おさるはあかちゃんを二ひきだっこしていて、あかちゃんのためにりんごをとっていました。おこっていたどうぶつたちも、あかちゃんをみて、りんごをあきらめてかえっていって、みんなやさしいなぁとおもいました。

わたしも、おともだちにゆずってあげたり、やさしくしたいとおもいました。

＊こうひょう＊

物語のあらすじをわかりやすくまとめることができていました。また、本を読んで感じたことが素直な言葉で書かれているので、とても読みやすかったです。これからもたくさんの本との出会いを大切にしていってください。

★ 奨励賞

「しゅくだいクロール」をよんで

おしどまり小学校　一年　すだ　ひまり

わたしは、このほんをえらんだのは、プールのおよぎをしりたかったからです。かおるくんが、プールのにがてなしょうたくんに、おしえてあげたので、そこがとてもやさしいところだったのでわたしもそうやってやさしくしてあげたいとおもいます。

しょうたくんは、プールがにがてで、さいしょは、およげなかったけどがんばったらできました。そこがとてもえらいとおもいました。わたしもそうやってにがてなことでもなんどもれんしゅうしてできるようになりたいです。

＊こうひょう＊

目的をもって本をえらんでいることが伝わってきました。本から学ぶことはたくさんあると思います。ぜひ、しゅじんこうのしょうたくんのように苦手なことにもチャレンジしていってほしいと思います。

小学校二学年の部

☆ 優秀作

イライラくんとこえだちゃん

利尻小学校　二年　大山　望叶

わたしがこの本をえらんだりゆうは、イライラということばがきになったからです。

わたしは、ときどきおとうととけんかしたときや、おうちの人にしかられてしまったとき、イライラしてしまいます。

なので、イライラということばがつかわれている、この本をよんでみようと思いました。

この本には、イライラくんとこえだちゃんが出てきます。イライラくんがそばにくると、みんなふきげんになり、こえだちゃんがいると、みんなごきげんになるお話です。

イライラくんは、おにごっこのおにみたいに、つぎからつぎへとうつってしまいます。わたしは、この本のように、弟がおこっていると、いつのまにかじぶんにも、イライラがうつっているなぁ、と思いました。

このお話のさいご、イライラくんは、と中でふきとんでしまいました。

こえだちゃんは、何もしゃべらないし、うごかないけれど、ごきげんにしています。どうしてか、わたしにはわかりませんでした。イライラは、ずっとつづくものではないのかなぁとも思いました。

わたしは、じぶんの心の中に、こえだちゃんにはずっといてほしいけど、イライラくんはこないでほしいです。

でも、ずっといばしょがないのもかわいそうだなぁと思いました。

なので、イライラくんも、ときどきならわたしの心の中にきてもいいよと思いました。

＊こうひょう＊

登場人物の気持ちを考えることのできる優しさが伝わってきました。自分なりに作品が伝えようとしていることを自分に置き換えながら考えることができている点もすばらしいです。イライラくんも一緒にみんなも仲良く過ごしていけるととってもすてきですね。

★ 佳作

ライトきょうだい

鴛泊小学校　二年　大藪　優月

ぼくは、ライトきょうだいを読んだりゆうは、ひこうきが大すきだからです。また、じっさいにむかしかいた人だから、すごいと思いました。

どこがすごいのかというと、はじめて、ひこうきをのって空をとびました。

じてん車やさんだった二人は、エンジンひこうきをひらめき、何どもしっぱいさせて、やっと大人になって、かんせいさせました。

ぼくだったら、何どもしっぱいして、めんどうくさいので、できません。

さいごに、いっぱいべんきょうをしたら、ひこうきがかんせいしたので、ぼくもど力する人になりたいです。

ライトきょうだいにもし会えたらどうして、べんきょうしただけで、ひこうきを作れるんですかと聞きたいです。

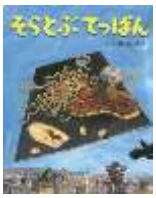
＊こうひょう＊

興味を持った本をえらんで読書ができることはとてもすばらしいです。自分が興味を持った本だからこそ『人ごと』ではなく、『自分ごと』としての読書をすることができます。今回、過去の偉人から努力の大切さを学んだように今後も読書を通して学びを深めていってください。

★佳作

「そらとぶてっぱん」をよんで

利尻小学校　二年　川村　旭陽



ぼくは、この本がお気に入りです。

このお話は、おこのみやきやさんのどうぐ、てっぱんが、おみせからだっ出して、ゆうえんちや海をぼうけんするお話です。

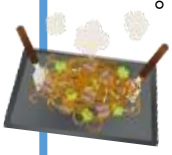
ぼくは、この本のタイトルを見たとき、なんでてっぱんが空をとぶんだろうと、ふしぎに思いました。

そして、本をよんでみて、本当のてっぱんは、とばないけれど、このお話みたいに空をとんで、ぼうけんしたいと思っているのかなぁと、そうぞうしました。

ぼくもてっぱんをもって、一しょにぼうけんしたくなりました。

このお話のさいご、てっぱんは、きちんともとのおこのみやさんのところへかえりました。

ぼくも、大せつなかぞくがまっているおうちにかえったら、きちんと「ただいま」と言うのを大じにしたいです。



＊こうひょう＊

物語のあらすじがわかりやすくまとめられており、自分の考えたことや思ったことをしっかりと表現することができています。『自分だったら』と考えながら読むことはとても大切です。これからも想像を膨らませることで読書を楽しんでください。

小学校三学年の部

☆　優秀作

すごく大切なもの

鴛泊小学校　三年　中山（なかやま）　智晴（ともはる）

ぼくには、弟が二人います。二番目の弟は、まだちいさいのでかわいいからやさしくできます。でも、一番目の弟は年が近いからけんかばかりです。

ぼくは、「レンタルロボット」という本を読みました。このお話は、弟がほしかったけん太が、学校の帰り道「ロボットかします」という店を見つけて、おこづかいで弟ロボットを手に入れるお話です。

弟ロボットの名前はツトムです。さい初はかわいかったけれど、かっ手におもちゃを使われたり、けん太のお気に入りのお母さんのひざの上をとられたり、だんだん理想の弟ではなくなっていきました。ぼくも、お兄ちゃんだから、ゆずらないといけない時がたくさんあります。おこられるのはいつもぼくです。

ある日、学校の発表でツトムが、お母さんのひざの上がけん太のお気に入りだと話してしまいました。けん太は、友達にからかわれてはずかしかったのでおこりました。でも、ツトムは、「けん太がおかあさんのひざの上を弟にゆずってくれるやさしいお兄ちゃんだ、と言いたかっただけ」と言いました。

ぼくも弟がいやまことばかりするので、おこってしまいます。言ってはいけない言葉だとわかっていて、つめたいことを言ってしまうこともあります。

けん太とツトムが僕と弟ににているので、気持ちがよくわかりました。

ぼくが一番心にのこっているところは、ツトムがけん太に書いた手紙です。

けん太は、ツトムのことがもういやになりツトムをお店に返してしまいますが、もう二度と会えないので、こうかいします。さい後に手紙を見つけて、そこには大きな字で

「おにいちゃんだいすき」と書かれていました。

ぼくは、感動して泣きました。なぜなら、ぼくの弟も、ぼくがどれだけつめたくしても、いっしょに遊びたくてついて来たり、いつもどんな時でもぼくのことをすきでいてくれることに気づいたからです。

さい後に、この本を読んで、おたがいに思い通りにいかないことも多いけれど、兄弟はいいなということを学びました。これからもとくに、一番目の弟とは、けんかもするかもしれないけど、世界にたった二人しかいないぼくの弟を大切にしていきたいと思います。

【講評（こうひょう）】

読書を通して日常生活を振り返り、大切なものに気づくことができたことをしっかりと文章にまとめることができており、とてもすばらしい読書感想文でした。時には『お兄ちゃん』でいることがつらくなることもあるかもしれませんが、今回感じた気持ちを忘れずに、これからも兄弟仲良く過ごしてください。

★　佳作

「はやぶさ、あきらめない心」から学んだ三つの大切なこと

鴛泊小学校　三年　佐藤（さとう）　周宥（しゅうすけ）

みなさんは、「はやぶさ」を知っていますか。

はやぶさはせかいではじめて小わく星のかけらを地きゅうにもち帰ることを目てきとして作られた、たんさきです。

この「はやぶさ、あきらめない心」には、二〇〇三年にうち上げられたはやぶさが、小わく星イトカワにつき、何度もトラブルを乗りこえて、地きゅうに帰ってくるまでがえがかれています。

ぼくは、この本から三つの大切なことを学びました。

一つ目は、あきらめないことです。はやぶさはうちゅうで、エンジンが作動しない、かけらが取れていない、電ぱをうけ取れないなど重大なトラブルをいくつもかかえました。しかし、そのたびに少しでもかのうせいがあるならとぎじゅつ者はあきらめませんでした。

二つ目は、めげないことです。しっぱいして気もちがくじけそうになっても、はやぶさチームは「がんばろう。」とはげまし合いました。

三つ目は、ねばることです。二〇〇三年のうち上げから七年もの間まちつづけ、やっと地きゅうに帰って来たのです。

ぼくは、なわとびで引っかかるとめげてしまいます。すぐにあきらめ、れん習をやめてしまいます。しかし、この本を読んであきらめずに、ねばることが大切だと思いました。すぐにはできなくても、れん習をつづければ上たつします。そう考えてがんばろうと思います。

ぼくは、うちゅうや自ぜんにとてもきょうみがあります。しょう来は、その分野にかんけいした仕事をしたいと思っています。それには、めげず、あきらめず、ねばることが大切です。これからもいろいろなことにちょうせんし、あきらめずに、頑張ってみようと思いました。

【講評（こうひょう）】

読書を通して学んだことを自分の将来と結びつけて考えている点がとてもすばらしかったです。あきらめないことで「はやぶさ」が小惑星のかけらを地球に持ち帰ることができたように、あきらめなければ夢も叶うと思います。これからも夢に向かって努力を続けていってください。

★　佳作

ちょっとだけ

利尻小学校　三年　加賀谷（かがや）　美緒（みお）

はじめに、わたしがなぜこの本をえらんだのかというと、自分はお姉ちゃんではないで、お姉ちゃんの気持ちをわかりたかったからこの本をえらびました。

この本は、四才くらいのなっちゃんにきょうだいができました。いつもママにやってもらっている事がママは、赤ちゃんのおせわでいそがしくてなっちゃんは、自分の事は自分でやっていくお話

です。

この本で心にのこった事は、なっちゃんは、はじめて自分でぎゅうにゅうをコップにいれようとしました。はじめていれるのには、むずかしいし、おもたいのに自分でいれられないと思っていそうだと思ったからです。

二つ目は、パジャマのボタンをママがやってくれるのをみていたからちょっとだけせいこうしました。見ているだけで練習もせずにせいこうするのは、すごいなぁと思ったからです。

わたしは、なっちゃんとはんたいです。自分は下にきょうだいがいないのでお姉ちゃんの気持ちがいままでわからなかったけど、この本を読んでお姉ちゃんの気持ちがわかりました。わたしには、兄ちゃんがいるのでわたしがうまれてなっちゃんと同じ気持ちになったのかなぁと思いました。

私が主人公だったら、下のきょうだいもかわいいと思うけど自分もお母さんにたよらないで自分からてつだいをしたいです。

お姉ちゃんのなっちゃんはお母さんがたいへんだという気持ちをわかっているようだと思いました。

主人公にみならいたい事は、人にまかせるんじゃなくて自分でもやるようにみならいたいです。

【講評（こうひょう）】

登場人物の気もちに寄り添う中で、いつもとは違う『お姉ちゃん』という視点から物事を考えることができたことはとてもすてきな体験だと思います。いつもとは違う自分になれることも読書の醍醐味だと思います。ぜひ、これからもたくさんの本と出会い、様々な視点で物事を見ることができる人になって欲しいと思います。

小学校四学年の部

☆ 優秀作

「一つの花」を読んで

鴛泊小学校　四年　黒川（くろかわ）　結凪（ゆうな）

わたしたちは、せんそうを知りません。テレビで見たり、本で読んだり、大人に話を聞いて想ぞうするしかありません。

この本では、せんそう中、食べ物が満足に手に入らなかったり、毎日てきの飛行機が飛んできてばくだんを落としたり、町が次々にやかれて、はいになっていく様子が書かれています。

わたしたちがくらす今は、おなかがすいたらご飯があるし、おかしやジュースも食べられます。ばくだんなんて落ちてこないし、大切な人がたたかいに行くとこもありません。

わたしたちは、とても幸せだと思います。そして、少しぜいたくなのかもしれません。わたしたちは、「一つだけ。」じゃなく、もっともっとほしがります。もっとあげたくても、あげられないお父さんやお母さんの気持ち、何も知らずにおにぎりをほしがるゆみ子の様子が、読んでいてとてもかわいそうだと思いました。わたしたちが、なかなか感じられない気持ちだと思いました。

ほかにも、おとうさんがせんそうに行かなければならない、もしかしたら、お父さんがせんそうで死んでしまうのかもしれないという、悲しくてつらいおわかれも、今ではありません。

本の中では、お父さんとのおわかれから十年すぎた日のことも書かれています。お肉とお魚を選べるくらい、食べ物があるよう

です。そして、ゆみ子は、お父さんの顔をおぼえていないようです。きっと、「一つだけ。」と言って、お父さんやお母さんをこまらせたことも、あの日の悲しいおわかれも、おぼえていないのでしょう。

平和にくらせるのは幸せだし、これからもずっと続いてほしいけど、この本に出てくる人たちのような気持ちがたくさんあったこと、まだわたしが知らないせんそうの話、悲しいおわかれがあったことは、平和にくらすわたしたちは、学び続け、伝えていかなければなりません。

【講評（こうひょう）】

戦争がもたらす、人々への影響、悲しみについて、よく考えることができています。今を平和に生きる自分たちだからこそ、戦争のことをよく知り、伝えていかなければという思いが伝わってきました。

★ 佳作

こもり森のわすれなぐさ

利尻小学校　四年　澤田（さわだ）　奈実（なみ）

子だぬきはひっこみじあんでもの思いにふけるくせがあります。こもり森とは、動物の子どもたちの子守する森で、大きな森のまん中にある小さな森のこと。子どもたちの遊び場になっています。子だぬきたちはみんなが遊んでいる所から少しはなれた所でいちごの花びらをむしりとっていました。わたしも子だぬきと少し一緒でひっこみじあんな所があるので、みんなが遊んでいるのも気になりますが、花びらを見ているのも好きだし、むしりとって遊ぶ気持ちがわかります。

ある日、こもり森の空にやってきた赤くてまるい不思議なものを見つけ、動物の子どもたちはおどろきます。ひっこみじあんな子だぬきが、

「あれはなんだろう。」と大声を出したほどです。それは赤い風船だったのですが、風船のことを知らない動物の子どもたちは、それが何か知るのには勇気がいることでした。そこでみんなで協力して風船をつかまえます。きかんぼのアマツバメが風船をつかまえようと飛びだった時に、子だぬきは赤くてまるいものが、

「わるものだったら、すぐににげてね。かまっちゃだめだよ。」と言ったので、わたしは子だぬきは、みんなを守りたくて言ったのだと思い友達を守りたいという気持ちが良くわかりました。

やっとつかまえた風船は、バンとわれてしまいました。動物の子どもたちは、風船のひもの先にむすびつけられたふくろの中にたねが入っていることに気づきました。このたねを育てると、あの赤くてまるい何かがふわふわ生えてくると考えました。それから、みんなで力を合わせて水をはこんであげました。

わたしは、いつまでたっても何もはえてこないのに、希望を捨てずに毎日育てていることが、本当にずごいなと思いました。わたしたちは、こんなふうに希望を持って頑張ることができるだろうかと考えました。

そしてとうとう花はさきました。みんなは、がっかりしました。赤くてまるい花ではなく、小さな空色の花だったからです。フク

ロウのおじいさんは、空色の花はわすれな草と教えてくれました。みんなは、悲しい気持ちになりました。なぜなら、秋のくれにこもり森の仲間たちはお別れをするからです。それぞれが、それぞれの道をゆくためにさよならをするからです。

「ねえ、ぼくのこといつまでもわすれないでいてくれる。」と子だぬきが言いました。

わたしも、友達が引っこしをしておわかれをしたので、わすれないでほしいという気持ちがわかります。その友達と過ごした一、二年は、おもしろいことがあった思い出でいっぱいです。四年生になってからもおわかれした友だちとみんなで集まり、仲良く遊ぶことができました。楽しかった思い出をわすれていないので自然と笑顔になりました。

この本を読んで、仲間とあきらめないで協力することが大切なことと、なんでも勇気を持ってやってみるすがたを学びました。わたしは、授業中勇気を持って手を挙げて答えを言おうと思いました。そして、友達とお別れしても思い出はわすれないということがわかりました。

【講評（こうひょう）】

登場人物と自分を比べ、自分の言葉で思ったことを素直に表現できています。作品を通して自分が学んだことも、しっかり書けています。勇気をもつこと、あきらめないこと、友達を大切にすること、どれも大事にしてください。

★佳作

「まあちゃん」を読んで

鴛泊小学校　四年　渡邊（わたなべ）　彩奈（あやな）

わたしは、まあちゃんという本を読みました。耳の聞こえない男の子の話です。

まず、耳の聞こえない世界ってどんなのだろう?と、耳をふさいでみたけれど、完全にはまわりの音は消えませんでした。まあちゃんは、どうやって生活しているのでしょうか。

まあちゃんがお母さんのおなかの中にいる時、お母さんが風しんという病気にかかったのが原いんで耳が聞こえなくなりました。

まあちゃんは小さいころ、言葉を話せませんでした。一年生になる時ろう学校へいきました。家から遠いところにあるそうです。ろう学校で、手話や口の動きで言葉をりかいする訓練をしました。かんたんな手話なら少しできるようになったそうです。

わたしは耳が聞こえるし、言葉も話せるのでまあちゃんの大へんさがあまり、分かりません。

ある日、まあちゃんのおばあちゃんが病気でたおれてしまいました。その時、ろう学校から帰ってきたまあちゃんとお姉ちゃんのかよちゃんが二人でおばあちゃんを大切にしようと手話でやくそくをしました。

おばあちゃんは頭の血管がつまってしまって体を動かすことも何もできなくなりました。でも、食べることはできます。

かよちゃんとまあちゃんで、おばあちゃんのお世話をしていましたが、まあちゃんがろう学校へ帰る日がやって来ました。

「行ってきます。」の手話でお別れをすると病気のおばあちゃんが少し反応しました。

実は、おばあちゃんも手話の勉強をしていました。まあちゃんの手話が伝わってきっとおばあちゃんも「がんばる。」と言ったんだと思います。

手話って心もつなぐものなのかな。と思いました。

今まできょう味なかったけど、わたしも手話をおぼえてみたいと思いました。そして色んな人と会話をして心もつながりたいです。

【講評（こうひょう）】

耳が不自由な「まあちゃん」の生き方について、自分なりに理解を深めようとしていることが伝わる感想文でした。自分と違う立場・境遇の人について、もっと知ろうという姿勢は、とても大切なものです。これからも、たくさんの本に触れ、色々なことに興味をもってください。

★　奨励賞

「かあちゃん取扱説明書」を読んで

鴛泊小学校　四年　天内（あまない）　颯斗（はやと）

この物語は、いつも母ちゃんに怒られてばかりの主人公の田村哲哉君が自分ののぞむような生活ができるように父ちゃんのアドバイスで母ちゃん取扱説明書を作っていくお話です。どうして、ぼくがこの本をえらんだのかというと「母ちゃん取扱説明書」という本の名前が不思議に思ったからです。

まずぼくが一番面白いと思ったのは、哲哉君が作った取扱説明書です。「食べたいご飯を作ってもらう方法」「早くしなさい方法」など、哲哉君はすごく母ちゃんの事をかんさつしているなと思いました。まるで、ぼくの母ちゃんみたいで、読んでいて、とても面白かったです。

次にぼくが一番いんしょうにのこった場面は、母ちゃんが大切にしていたコップを哲哉君がこわしてしまったところです。怒らずにいつも以上に母ちゃんがやさしかったからです。ぼくだったら、大切な物をこわされたらおこると思いました。哲哉君のお母さんは、やさしいなと思いました。

そして、最後にびっくりしたのは、内しょで書いていた取扱説明書が実は、母ちゃんにバレていたところです。なんでも母ちゃんにはおみとおしでかなわないと思いました。この本を読んで思った事は、取扱説明書というのは、相手の気持ちを考えたり知るためのきっかけになるものだと思いました。哲哉君も、はじめは母ちゃんの事がわからずに怒ってばかりいると思っていました。

しかし母ちゃんを観察するうち、仕事しているかっこいい母ちゃんや、大切なコップをわってしまってもやさしくしてくれた母ちゃんなど知る事ができて哲哉君は変わっていきました。相手を知るという事はとても大事だと思いました。

ぼくは、大人になったら母ちゃんや哲哉君のように自分の事よりも相手の気持ちを考えてあげられるようなやさしい人になりたいと思います。

【講評（こうひょう）】

作品の内容を素直にとらえ、自分が思ったこと、考えたことをしっかり書くことができています。「相手の気持ちを考えてあげられる人になりたい」と、自分が将来目指す姿を、明確に示している点も良かったです。

小学校五学年の部

☆ 優秀作

小公女

利尻小学校　五年　中田（なかた）　理央奈（りおな）

私は、小公女という本を読みました。選んだ理由は、以前この本を読んだ時にひどいあつかいにたえ、力強く生きるセアラがすごいと思い、この本を好きになったからです。

このお話の主人公は、裕福な家に生まれたセアラという一人の少女です。セアラは、ロンドンの寄宿学校へ入学します。しばらく幸せに暮らしますが、とつ然の父の死をきっかけに、先生方の接し方が激変し、屋根裏部屋で過ごすことになってしまいます。辛く苦しい生活の中でも、やさしさと気高さを失わず、一生懸命生きる、そんなセアラの物語です。

お父さんが亡くなったことで、屋根裏部屋で貧しい暮らしをすることになったのに、いつまでもプリンセスセアラでいることを忘れず、日々たえているセアラの姿が、とても心に残りました。私だったら絶対に、セアラのよう力強く生きていくことは無理だと思います。自分が辛い時に周りの友達に対して、優しく接することのできるセアラはステキだなと思いました。

また、財産がなくなったとたんに、態度を変え、セアラのことを苦しめた寄宿学校の先生のことをゆるせません。理由は、お金持ちだった時とお金を持っていない時で態度を変えるというのは、学校の先生として、絶対にだめなことだと思ったからです。私は、

お金を持っているか持っていないかではなく、その人のいい所やがんばっている所を見てほしいです。

この本を読んで大切だと思ったことは、三つあります。一つ目は、人のいい所やがんばっている所を見ることです。私は、寄宿学校の先生方みたいに、お金を持っているか持っていないかで人のことを判断せず、いい所やがんばっている所をしっかり見て判断できるようになりたいです。

二つ目は、優しさと気高さを失わないということです。私もセアラのように、自分が苦しい時でも、力強く生きていきたいです。

三つ目は、最後まであきらめない強い心をもつということです。自分の夢をあきらめず、何事にも勇気をもってこうと戦っていこうと思います。

【講評（こうひょう）】
文章構成がしっかりしていて、とても読みやすい感想文でした。本を選んだ理由、作品のあらすじ、自分が大切にしたいと思ったことがよく書けています。

★ 佳作

「種谷海璃、児童会長に立候補します！」

鴛泊小学校　五年　種谷（たねや）　海璃（みり）

私は、「五年二組横山雷太、児童会長に立候補します！」という本を読みました。この本を読んだきっかけは、お母さんが「おもしろそうだよ。」とすすめてくれたからです。

この本は、「児童会長なんか興味ない。」という主人公雷太が仲の良いなんでも屋のメンバー良介、仁田、優と「児童会長になってくれ。」という依らいに最初は「正直めんどうだ。」と思っていたけれど、たくさんの人と協力することによって、児童会長になる物語です。

私は特に心に残った場面が三つあります。一つ目は、「雷太、頑張れよ。」「ちゃんとスピーチしろよ。」「オレ、雷太に入れっからな。」など、みんなが雷太を応援した場面です。今まで、玄関であいさつ活動したり、校庭や一、二年生教室のそうじ、スピーチの練習などを頑張り、仲間と最後までやりとげたので、むねがジーンとしました。

二つ目は、雷太があいさつ活動をしている中で、不登校の子がいることを知り、もっと本気で良い学校、楽しい学校にしようと思い、あいさつ活動のとき、みんなにハイタッチをする場面です。私は、ハイタッチしてもらえたら、友達とのきょりをちぢまるから、うれしくて学校に行くのが楽しみになります。なので、こんな事を考えられる雷太が、すごくてうらやましいです。

三つ目は、雷太がえんぜつするときに、心ぞうがバクバクしてきんちょうしていたら、雷太とくされえんの知香が、小さく雷太にガッツポーズをして、雷太のきんちょうをほぐしてくれた場面です。私も、雷太と同じような経験をしたことがあります。副会長に立候補したとき、心ぞうがバクバクしてきんちょうしたけれど、みんながえんぜつの前に「頑張ってね。」と言ってくれたので、リラックスして話すことができました。なので、とても共感できました。

私は、この本を読んで、改めて友情のすばらしさ、協力するこ

との大切さを感じることができました。
私は、これから児童会長になりたいなと思っています。そこで、友情のすばらしさ、協力することの大切さを思い出して、みんなが楽しいと思える学校にするため、あいさつ運動をメンバーみんなで協力して、頑張りたいです。
『種谷海璃、児童会長に立候補します！』

【講評】
丁寧に本を読んでいることが伝わる感想文でした。これから児童会長に立候補する今だからこそ選べた一冊でしたね。この本を通して感じたことを、自分の学校生活に活かしてください。

★ 佳作
だれも知らない小さな国

利尻小学校　五年　河越　姫花

私は、『だれも知らない小さな国』という本を読みました。この本を選んだ理由は、だれも知らない小さな国がもし本当にあったとしたら、それは一体どんな国なんだろうと不思議に思ったからです。
この本は主人公のぼくが、昔から伝わるこぼしさまという神様をさがしに、友達と一緒に小山へ行くところから始まります。ぼくは一人でひみつの場所を見つけますが、結局こぼしさまには会えず、大人になります。しゅう職先をこぼしさまのいる小山がある町にし、小山に小屋を建てます。その後もこぼしさまをさがし続け、最後にこぼしさまと仲良くなるというお話です。
一番おもしろかったところは、山の持ち主である、峯のおじさんの家に泊まった場面です。こぼしさまがかえるの姿に化けて、天井からぼくに会いにやって来たからです。こぼしさまがかえるに化けて天井からやって来るなんて、想像していなかったのでおもしろかったです。
峯のおじさんにぼくが言った、
「小山をください。」
という言葉も印象的でした。私も、三年生のころ逆上がりができなかったけれど、いつかはできるようになりたいと思っていました。なのでぼくの、『今は無理だけれど、いつかはかなえたい』という気持ちに共感できました。
この本を読んで改めて大切だと思ったことは、一度やると決めたら、できるようになるまであきらめずにやりとけることです。あきらめなければ、主人公のぼくのように今すぐにはできないかもしれないけれど、いつかは願いがかなうかもしれないからです。
私は、これから学校の授業のなかでわからない問題があっても、あきらめずに最後までやりとげたいです。自分だけで考えてもわからないときは、友達や先生にヒントをもらってわかるようにしたいです。
また、できないことや苦手なことがあっても、やらないのではなくできるようになるまであきらめずに、たくさんの練習を重ねてできるようにしたいです。

【講評（こうひょう）】
本を読んで感じたことが、素直に表現されているところが良かったです。「一度やると決めたら、あきらめないでやりとげる」と、自分が大事にしたいと思ったことが、よく伝わってきました。

★　奨励賞

「許すということ」

鴛泊小学校　五年　酒井（さかい）　綾乃（あやの）

「皆さんには、大切な家族がいますか。」
当たり前だと思っていた家族が、突然事故で亡くなったら、私たちは何ができるだろう。
　このお話は、三十六年前に同僚を巻き添えに事故で死んだ父の罪を背負い、生涯自分に笑うことも、幸せになることも禁じてずっと働きづめの母ちゃんと、それをずっと見てきたヒロシが大人になって、家族を持ち母親の人生を考える所から始まります。
　このお話にはいろいろな家族がでてきます。友だちに脅されて、親友をいじめ罪の意識から学校に来れなくなり、田舎の学校へ引っこした親子・イジメを受けて自殺未遂を計り引っこした親子・認知症になった祖母を介ごする親子・家庭の事情で母親が出ていきバラバラになった親子・学校の先生になった息子と先生を退職した親子・母に頼りながら仕事と育児の両立をがんばっている親子などみんないろんな悩みをかかえています。
　ほんの少しの勇気があれば、前に進めるのかもしれないけれど、なかなか思うように出来なくて苦しんでいます。
　いやな事、逃げ出したい事に立ち向かってるのはとても勇気がいるし、大変だけどそれをずっと続けてきたヒロシの母親の話を聞いて親子の気持ちが少しずつ変わっていきます。
　私が心にのこったのは、父親のおこした事故で亡くなった同僚の家に母親があやまりに行ったところです。
「絶対に許さない。一生忘れないで、背負ってください。」
私はとても胸にささる言葉だと思いました。ヒロシの母親はとてもつらかったと思います。でも、二十六年たって同僚の娘から、
「ありがとう」
と言われて本当によかったなぁと思いました。
　私のお母さんは毎日仕事で忙しいけれど遊んでくれたり、勉強を教えてくれたりして、いつでも私の味方になってくれます。
　私は笑顔のお母さんが大好きです。お母さんが笑顔でいると私も幸せな気持ちになります。ヒロシのお母さんが早く笑顔になったらいいなぁと思いました。

【講評（こうひょう）】
本の内容を深く読み解くことで、自分の思いや考えを書き表すことができています。この作品を通して、自分の生活と照らし合わせているところも良かったです。

小学校六学年の部

☆　優秀作

「いのちの作文」を読んで

鴛泊小学校　六年　渡邊（わたなべ）　拓斗（たくと）

ぼくは、「いのちの作文」というぼくと同じ年頃の瞳ちゃんが病気と闘った実話を読みました。

瞳ちゃんは十二才の時に、とつぜん足がいたくなり病院へ行くと右大たい骨肉腫という骨のがんだということがわかりました。肺にも転移していて、なんと余命半年というきびしい状態でした。瞳ちゃんは自分の病気を受け入れ、闘う覚悟をしたそうです。

瞳ちゃんと同じ年頃のぼくですが、今オスグット病といって左ひざの下、痛みがあります。「何でぼくだけこんな痛い思いをしなければならないんだ！」と思った事が何度もありました。でもぼくの何倍も瞳ちゃんの方が痛いはずです。

病気と闘う事を決めた瞳ちゃんは、つらい抗がん剤治りょうなどにたえて、小学校を卒業することができました。骨のがんの右足を切断する手術の日、瞳ちゃんは手術をやめる事にしました。自分の足と一緒に生きたかったからです。ぼくだったら左足をすぐに治したいのに…。

再び、中学生の夏に入院してしまうのですが、同じく病気と闘う子どもたちに折り紙や絵をプレゼントしてはげましたりしていました。自分も病気でつらいのに、ぼくだったらできません。

その後、色々な手術を乗りこえて、中学二年になりました。瞳ちゃんは「今生きていることに感謝して、悔いのない人生を送って」という内容の「命を見つめて」という作文を書きました。ぼくの考えですが、それは元気の人、病気と闘っている人…すべての人へ向けたメッセージだったのかな?と思っています。このメッセージには瞳ちゃんの思いが込められており、十三年と八ヶ月、短い人生だったけど、病気と闘い頑張って生きぬいた、悔いのない人生だったと思います。

ぼくの祖父もがんで亡くなりました。ぼくが生まれる少し前のことです。のどのがんだったので、言葉が話せず、その時の思いや伝えたい事は、日記帳に書いてあったそうです。その中には、死ぬことのきょうふや、ぼくが生まれてくるのを楽しみにしている事が書いてあったそうです。それは、祖父の命のメッセージだったと思います。

祖父に「ぼくは元気に生まれたよ、悔いのないよう強く生きるよ」と伝えたいです。

そして今度、祖父の命のメッセージがたくさん詰まった日記帳を見てみたいです。

【講評（こうひょう）】

「生きる」ということのありがたさを、改めて考えさせられる感想文でした。あたりまえのように思える、「毎日を健康にすごす」ということが、どれほど幸せなことなのか、深く考えることができています。この本を通して得られた気持ちを、これからも大切にしてください。

★　佳作

「海底二万マイル」を読んで

利尻小学校　六年　武田（たけだ）　龍太（りゅうた）

ぼくが、『海底二万マイル』という本を選んだ理由は、海底二万マイルはどんな所で、どんな世界が広がっているのかを知りたいと思ったからです。

この本の内容は、主人公のピエールアロナックが、一八六六年に起きた奇怪な事件の謎を解くお話です。その謎とは、いくつもの船に大きな穴があくという事件です。巨大な物にぶつかって穴があいたと思っているアロナックは、正体をつきとめるために、召使いや乗組員と一緒に冒険へ出かけます。

ぼくが、この本を読んで心に残った場面は、主人公のピエールアロナックとネモ艦長と乗組員が、海底散歩をしている部分です。理由は、インド人の真珠採りがサメにおそわれた時に、ネモ艦長が短刀でサメの腹をさして助ける、勇気ある姿に感動したからです。もしぼくの友達がサメにおそわれていたら、助けたいきもちがあるけれどこわくて助けに行けないと思います。テレビを見たり本を読んだりした時に、サメが人をおそう場面を見てそのこわさを知りました。自分が死ぬかもしれないのに、仲間を助けに行くとてつもなくネモ艦長は、勇敢な人だと思いました。

ぼくも『海底二万マイル』の主人公のように、巨大なものの正体をつきとめてみたいです。あまり知られていない謎の生き物やものの正体をつきとめる本やテレビ番組がすきだからです。

この本を読んで、改めて大切だと思ったことが二つあります。まず一つ目は、仲間や友達を大切にするということです。サメにおそわれた仲間を助けたネモ艦長のように、ぼくも、困っている仲間や友達がいたら助けたいです。そして、一人で遊んでいる人を見かけたら声をかけようと思います。

二つ目は、協力するということです。主人公のピエールアロナックや乗組員、ネモ艦長たちが協力して巨大な物の正体をつきとめたように、ぼくも友達みんなと協力して、何ごとにもチャレンジしていきたいと思います。

【講評（こうひょう）】

登場人物の行動と自分の経験を重ねて考えることができています。今後の自分の生活に生かそうとおもっていることをはっきり書けている点にも好感がもてました。

★　佳作

「人狼サバイバル」を読んで

鴛泊小学校　六年　寺田（てらだ）　はな

「失敗や間違いは「挑戦」の証だ。挑戦する者はすべて美しい。そしてそれを笑う者こそが見苦しく、恥ずかしい。」

私はこのセリフが一番心に残りました。

なぜこのセリフが一番心に残ったかというと、私も発表や人前に出る時に、笑われるかもしれないと思い、発表できない時があるからです。授業や行事などで、問題の説明をしたり、学芸会の

踊りやげきの時などに、間違った説明をしたら恥ずかしい、ふりやセリフを間違えたら恥ずかしいと思うことがありました。そのうえ、笑われたら恥ずかしいと思うこともありました。なので、このセリフを読んで、失敗や間違いは恥ずかしくないし、挑戦することが大切だと思いました。

二つ目の理由は、あきらめないで、挑戦することが大切だと思ったからです。むずかしい問題や、苦手でできないことがあった時に、問題が解けなくてあきらめて人に聞いたり、苦手でできないことを他の人にたのんだり、できないからすぐにあきらめてやらないことがありました。なのでセリフを読んで、問題が解けなくてもあきらめてすぐに人に聞かず、自分で一生けん命考えたり、苦手でできないことでも、他の人にたよらずに、自分で挑戦して、苦手なことでもできるようになることが大事だと思いました。なので私は、このセリフが一番心に残りました。

このことから私は、この話の作者は失敗や間違いは、恥ずかしい事ではない。あきらめずに挑戦し、最後まで一生けん命やりとげる事が大切だということを読者に伝えたかったのだと思いました。

この話を読んで、これから、発表が苦手だけれど、挑戦して発表を増やしていきたいです。他にも、修学旅行や学芸会などの二学期の行事や三学期の行事などでも、いろいろなことに挑戦し、中学校に向けて、いろいろなことができるようにしたいです。何事でも、一生けん命やりとげられるようにがんばりたいです。

【講評（こうひょう）】
感想文の書き出しが、本の一節から始まっていて、とてもインパクトがありました。「間違い、失敗をおそれない」「あきらめないで、挑戦する」と、本を通して大切だと思ったことを、自分のエピソードと交えながらよく書けていました。

★ 奨励賞

シートン動物記マガモ親子の陸の旅

鴛泊小学校　六年　小神（こがみ）　天寧（あまね）

「みんな、元気を出して進むのよ！」
「しゃがんで！」
これらのセリフは、生まれたばかりの十羽のマガモをたった一人で育てる夫を亡くした母マガモの言葉です。私は、このお話を読んで母マガモの愛情が伝わってきました。
「みんな、元気を出して進むのよ！」
というのは、つかれた子どもたちをはげます言葉で、
「しゃがんで！」
というのは、野生に生息する敵から子どもたちを安全に守ろうとする言葉です。この他にも、母マガモの優しさと、自然界のきびしさがわかるところがあります。タカにおそわれて、一羽の子ガモをうしなっても、残りの九つの大切な命を守ろうとするところです。

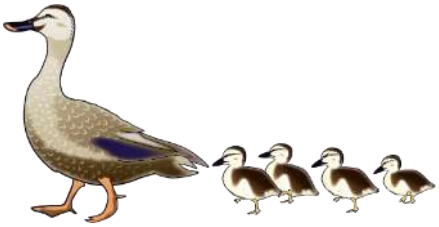
私は、この本を読んでお母さんのことを考えました。マガモ親子や他の動物のように、敵におそわれたり、ご飯が食べられなかったりすることはないけれど、それはすべてお母さんのおかげだ

と思いました。まだわからないことだらけだけど、それを一つ一つ教えてくれるのはお母さんだし、ご飯をお腹いっぱい食べれるのもお母さんのおかげだと思いました。習性や生活が違っても、どの生き物も親がいないと、りっぱに成長できません。それは、どの動物も同じだと改めて思いました。

マガモ親子の陸の旅を読んで、私はこれからお母さんにめいわくをかけないようにがんばりたいです。そして、ふだんしてもらっているあたりまえのことに感謝して、大人になったら恩返しがしたいです。この物語の最後にはさらわれた子ガモが帰ってきて、やがてそれぞれのつばさで羽ばたいていきます。私も子ガモたちのように成長した姿を見せられるようにがんばりたいと思いました。

【講評】

本の内容を通して自分の母親と照らし合わせて考えているところが良かったです。自らの生活を振り返り、「今幸せに生きていられるのは誰のおかげなのか」ということを、よく考えることができています。



中学校の部

☆ 優秀作

「ジャッジメント」を読んで

鴛泊中学校　二年　吉田　汐音

大切な人が殺されて、復讐がゆるされるならどうしたいですか。この物語は広報監察官鳥谷文乃視点を中心にくり広げられる、さまざまな人の復讐にあたる苦悩をえがいた作品です。

私がこの本を読みおえて、まず最初に思ったことは、「難しい」です。復讐法は正しいのか、人を幸せにすることができるのかはわかりません。その疑問に言えることは、人それぞれということです。復讐をやりとげたあとに込み上げてくるものがすっきりした、などの過去をふりきれた反応か、罪悪感と喪失感にさいなまれるのか、その違いは基準の「ものさし」が違うことだと思います。幼少期から他人の意見を取りいれて作られていく自分だけの「ものさし」。形も重さもすべてが同じなものはありません。だからこそ人それぞれ違うのだと私は考えます。

「赦す」ことについて、私はこの本を読んでから考えさせられました。罪を犯した他人を赦し、大切な人がころされた時、なにもできなかった、もしくはそのきっかけとなってしまった自分を赦すことができれば、復讐法など存在しなかったのではと思うようになりました。ですがこれはすごく難しいのです。皆さんはこんな言葉を知っていますか。「罪を憎んで人を憎まず」。まさにこの言葉がぴったりだと思いませんか。私はもし自分が復讐をするか、法律で裁くか選べといわれたら法律で裁く方を選びたいです。ぜひ加害者には刑務所で自分のしたことを見つめなおして

ほしいと思える人になりたいです。

私が生きているこの世界にはいろんな人がいて、いろんな事情を抱えている人がいます。殺したくないのに殺すしか方法がなかった人だってきっといるはずです。だからといって罪を軽くしろとはいいません。ですが考え改められる意思があるなら皆が復讐法を選ぶ人も、そもそも殺人を犯す人だって減ると思います。死んで罪から逃れさせるのではなく、自分の意志で反省し生きていってほしいです。

皆さんは大切な人が殺されてしまっても、その加害者を「赦す」ことができますか。自分も「赦す」ことができますか。まずは自分から歩みより、お互いを赦し合える世の中になってほしいです。怒りや憎しみに捕らわれず、たまに後ろを向いて立ちどまってもいいから、前に進んでいきたいです。

この本で私の主観は変わりました。ぜひ皆さんも「赦す」ことについて考えてほしいです。

【講評】

大切な人の命が奪われたとき、その加害者を赦せるかーという簡単に答えを出すことができないテーマに、真正面から向き合った感想文でした。自分なりの答えを出すために試行錯誤したあとが、文章から伝わってきました。

☆ 優秀作

ひだまりに花の咲く

鬼脇中学校　一年　冨岡　小華

「そんなのわたしにはできない。わたしは人前に立つのも、目立つのも、苦手だから」これは、この物語の主人公である「奏」の言葉です。この言葉を見た時、「私と一緒だ」と思いました。

私は奏と一緒で、人前に立つことも目立つこともとても苦手です。奏が私と違うのは、小学生のときにみた舞台に憧れているということでした。彼女は友達からのさそいで演劇部へ入部します。そして、脚本を担当する「一維」に三年に一度だけ上演される脚本を音読しているところを偶然聞かれ、「おれのつくる舞台に立ってくれ」とお願いされます。結局奏は舞台に立つことを決意するのです。私は、引っ込み思案な奏がみんなの前で演技をすることが自分には真似できないと思いました。人前に立つことが苦手な奏が舞台に立つことを決意した理由、それは二つにしぼられると私は思います。

一つ目は、小学生のとき見た舞台に立つ憧れの人のようになりたいという強い意志があったからだと思います。「だってわたしは、やりたくないと思ったことなんて、一度もなかったから」これは、奏が心の中で思っていた言葉です。私はこの言葉が大好きです。やらないのは、やりたくないからではない。自分にはできないと思っているからだという自分の気持ちに気付かせてくれる言葉だからです。

そして二つ目は、仲間からの励ましがあったからだと思います。奏が舞台に立つことを決意したのは、一維の「お前が今この手を掴まなかったら、おれはもう諦める。二度と鮎原を無理に誘うことはしねえよ。ただし、掴んでくれるなら、お前の世界を変えてやる」という心に刺さる

ような言葉があったから、決意できたのではないでしょうか。もちろん一維以外の演劇部のみんなの応援も奏を強くしてくれる大切な存在だったと思います。そして奏は、舞台に立ち、無事、成功させることができました。

私はこの本を読んで、奏の姿を見習いたいと思いました。これから私達にも文化祭があります。私も奏のように、そして気が強くていつでも前向きな憧れの人のように、何事にも挑戦して、自信をもってみんなの前に立てるようなそんな人を目指したいです。そして、奏を励ました一維のように、誰かの勇気になり、救いになるような言葉をかけられる人になりたいと心からそう思いました。

【講評】

人前に立つことに自信をもてる人は、そう多くはないと思います。ですが、心の中の本当の気持ちはどうだろう。「だってわたしは、やりたくないと思ったことなんて、一度もなかったから。」と思っている人は多いかもしれません。せっかく出会えたこの本を、迷っている自分や自信のない自分の背中を押してくれる一冊にしてくださいね。

★ 佳作

「一人ぼっちの教室」

鴛泊中学校　一年　黒川　遥凪

この本は、「いじめ」をテーマに、加害者、被害者、傍観者の三つの立場になって分かった事、感じた事が書いてある。「いじめ」という言葉を聞いて何を思い浮かべるか。私は真っ黒で残酷で前も後ろも何も見えない孤独のようなものと答えるだろう。

この本の主人公、秋本穂花は自分がいじめられる前はいじめの辛さを知らなかった。穂花は、千湖という女の子をクラスのみんなでいじめていた。無視したり、悪口や陰口を言ったり他にもたくさんの事をしていた。三年生の二学期、穂花が学校に行くとクラスのみんなに無視をされ、おまけに悪口や陰口を言われた。私はこの本の続きを読むたび、胸が苦しくなり、

「人にした事は必ず自分に返ってくる」と祖母に言われていた事を思いだした。改めてその通りだな、と思った反面これ以上辛い思いをする人が増えてもいいのか、とも思った。でも続きを読むと何だか、涙が出そうになった。穂花は千湖をいじめていたのに、逆の立場になった時、一番始めに手を差し伸べてくれたのは千湖だった。この時に私が思ったのは、分かってくれる人が一人はいる。いじめられても手を差し伸べてくれるような友達を大切にしよう、と思った。

身近な人に対する怒りや憎しみは、もっと愛されたい、もっと自分を認めてほしいという愛情の裏返しだと思う。だからもし、人をいじめている人がいたら、もっと愛されたい、認められたい、と思っている人なんだ、と思うようにする。他にも色んな種類のいじめがある。暴力、肉体的ないじめや性的ないじめ、言葉によるいじめ、ＳＮＳ・ネットいじめなどの種類がある。この中で一番多いのは、言葉のいじめだ。あの子はああいう子だから大丈夫とか周りが言うことによってその人の自由や行動が少しずつ制限されて行ってしまうと思う。つまり私が言いたいのは周りにいじめがないと思い込んでいても、周りが決めつけてしまったイメージが相手のことを少しずつ追い込んでいる可能性があるということだ。いじめの定義「相手が嫌だと思ったらいじめ」という言葉は正しいと思う。いじめは、気づかないうちにエスカレートする。だから、早い段階で気づいたら対処しやすいと思う。

いじめはされた人にしか分からない辛さや悲しみがあると思う。でも、その気持ちを忘れないでほしい。仕返しにいじめをする、などと考えないでほしい。私は、日常にひそんでいるいじめの陰に一人でも多くの人が気付けるようになってほしい。

だから私も、相手の気持ちを考えて人へ接したり、言動や行動にも気を付けていき周りからいじめがなくなるようにしていきたい。

【講評】
「人にしたことは必ず自分に返ってくる」「相手が嫌だと思ったらいじめ。」どちらも人生の中でよく耳にする言葉の一つですが、黒川さんの文章を通してこの言葉を聞くと、より実感を伴って感じられました。

★ 佳作

「下町ロケット」を読んで

鴛泊中学校　二年　亀田　七潤海

この本は、佃航平という主人公が、ロケットを飛ばすことを夢見て、奮闘していく物語です。

私がこの本を読んで良かったと思う所が、三つあります。

一つ目は、佃航平さんが、どんなことがあろうと、ロケットを開発させて、飛ばしたいとゆう夢を最後まであきらめずに、つらぬき通したことです。私は、この場面を読んで、自分とは真逆な性格だと思いました。自分は相手の意見にただ賛成したりするだけなので自分の意志をしっかり持てる佃さんは、とてつもなくかっこ良くて、今の自分の意志の強さを分からせてくれるきっかけにもなったからです。

二つ目は、どんなことにも一生懸命に取り組む佃さんの姿勢です。本の内容で、佃さん側の会社が理不尽な特許侵害で訴えられる場面があるのですが、冷静な判断と、意志の強さで解決できていた所が、すごいなと感じました。この場面で、佃さんは、他の人とは違いとても偉大な方だなと思いました。また、読んでいくうちに、佃航平さんは、後輩思い出もあるなと思いました。これをふまえて、佃さんは、自分の意志がとても強くて、正しいと思ったことは積極的に取り入れるという一面もありながら、冷静な判断力と、後輩を思う気持ちは、他よりも多くて、とても優れている人だと私は思います。

三つ目は、佃さんの夢が叶ったあとに、佃さんが見せた笑顔です。この場面を読んで、私は、この笑顔は、一生懸命努力し続けて、最後まであきらめずに頑張ってきた人じゃないと出せないことだと思いました。一度は、窮地に立たされてどうなることかと思いきや佃さんの気持ちはずっと一途なままで、常に前向きに取り組む姿勢を見せていたからこそ窮地から脱することもできたと思うので、私も、佃さんを真似してみたいです。

この本を読んで私は、作者は自分の夢をしっかり持ち、その夢をどんなことがあっても実現してほしいという気持ちがこめられていると思いました。なので、自分も佃さんみたいに自分の気持ちを一途に持ちたいと思いました。

【講評】
思いを貫くことの尊さや素晴らしさが、まっすぐな言葉で素直に書かれていました。読書を通して、困難にも負けずに立ち向かっていくエネルギーを得たことが、文章から伝わってきました。

★ 佳作

「西の魔女が死んだ」を読んで

鬼脇中学校　二年　牧野　海結

『わたしはもう学校へは行かない。あそこは私に苦痛を与える場でしかないの。』

これは主人公の『まい』が言った一言です。この一言を聞いたまいの母は、母方の祖母である『西の魔女』の家で生活することをすすめます。おばあちゃんの家で生活すると決めたまいは、おばあちゃんから魔女の修業を受けます。『魔女の修業』と聞くと、想像がつかないと思います。私も最初は何をするんだろう、そう思っていました。でも修行の内容は、『毎日早寝早起き、食事をしっかりととって、運動をたくさんして、規則正しい生活をすること。そして、何でも自分で決めること』でした。これを知った時、なんだ、簡単じゃないか！と思いました。ですが私のこれまでの生活を振り返ってみれば、全く出来ていませんでした。まいのおばあちゃんが

『そういう簡単なことが一番難しい。』

と言っていたように、毎日出来て簡単そうなことが一番難しいんだなと思いました。

そしてもう一つの『何でも自分で決める』ということ。私は自分で決めることが苦手ですぐ『何でもいいよ～』や『どっちでもいいよ、任せる！』と言ってしまいます。何でも人に任せてしまい、自分で決めようとしないのです。だからこの本を読んで、自分で何かを決めることができる。という力を身につけていきたいと思います。まいのおばあちゃんは修行をやっていく中で、まいに生きていくために大切なことを教えてくれたのではないか、と思います。

ある日、お父さんが来て家族三人でもう一度住まないか、という話が出ます。まいは大好きなおばあちゃんとこれからも一緒にくらすか、家族三人でおばあちゃん家から遠い所に行くか、究極な決断をしなくてはいけなくなります。結果、まいは家族と住むことにします。私がもしそうなったら、私も家族と住むという決断を下すと思います。でも、大好きなおばあちゃんと今まで過ごしてきて色々学んだこともあるし、思い出もあります。だからとても悩んで悩んでこの決断をしたまいは悲しかったと思うけど、おばあちゃんと過ごす最後の時までしっかり修業の一つであった『何でも自分で決める』ことを守っていてかっこいいなと思いました。

このようなことに気付くことが出来たのはこの本に出会ったからだと思います。『規則正しい生活をすること』『何でも自分で決められるようになるというのは生きていく中で大切なこと』を実感しました。この本を読んで、色々なことを学び、自分の目標が出来てとても必要なことを学びました。私はまいみたいにたくさん努力して、周りから認められるようになりたいです。

【講評】

「簡単なことが一番難しい」という台詞に共感します。特に、「何でも自分で決めること」は、簡単に出来そうで意外と他人任せにしてしまっている人も多いのではないでしょうか。この一冊を通して、大切なことに改めて気づくことができましたね。ぜひ、本から学んだことをこれからの生活にいかしていってください。

★ 佳作

「この世界の片隅に」を読んで

鬼脇中学校　三年　熊谷　宙大

「今の世界に生まれてきてよかった」この本を読み終わった時に改めて今の世界の平和が身に染みました。この本は主人公のすずが世界で戦争が起きている中で、呉で主婦として生活していく話です。

この本の中で焼夷弾という爆弾が家に落ちてきた時に、すずが夫の周平に「家を守りきれるんか」と言われたのを思い出し、焼夷弾の火を必死で消している場面がありました。僕はたとえ「家を守りきれるんか」と大切な人に言われても、爆弾の火を消すという無茶なことはできないと思います。なぜなら、自分の家のことより命を大事にしたいからです。爆弾と聞いただけで少し怖さもあるし、爆発したらどうしようなどと不安でいっぱいになるはずです。僕は以前宿泊研修をしている時に、北朝鮮から日本に向けてミサイルが飛んできたことがあります。その時近くに落ちたわけでもないし、自分自身や家族や友達などに被害はなかったけれど、とても不安と恐怖心でいっぱいになりました。だからすずのように、もえている爆弾の火は消しには行けないと思いました。その勇気を見て僕は、命より大切なものがある人もこの世の中にいるんだなと感じました。

また、戦争が起きていた時代に、どんな生活をしていたかも知ることができたのも、この本を読んだからです。僕は二つのことが印象に残っています。一つは鉛筆の話です。今は鉛筆をたくさん買って使っている人も多いと思います。ですが、この本ですずは、とても短い鉛筆を削り、「これで今週もつかね」と言っていました。今は鉛筆が短くなったら、捨てて新しいものを買って使うけど、昔は鉛筆一本買うのも大変だったんだなと思いました。

二つ目は食料についてです。今は毎日白いお米を食べたり、おいしいお肉を食べることができますが、昔はお米も少なく、お米をふくらませて食べたりしていました。また、食料の配給というものがあり、食べられる量は限られていました。この二つの話を読んで、どの家庭も貧しく毎日お金も食料も節約して生活していて、一日一日生きていくのが大変そうだなと感じました。

この本を読んで、今の世界に生まれてきてよかったと思いました。なぜなら、毎日、恐怖ととなり合わせで生活していくことは自分にはできないし、自分の命がいつなくなってしまうかわからない不安があるからです。ですが、今も、ミサイルが飛んできたり、西南アジアの方ではまだたくさん紛争があります。なので全世界で戦争がなくなり兵器もなくなる平和な国になってほしいと思います。そのために今後もっと世界各国と仲を深めていくことが大切だと思います。

【講評】

この作品は、私も漫画やドラマで拝見しました。たった七〇年前の日本で起こった戦争の現実を知ることで、改めて、現在の恵まれすぎている自分の生活を実感することができましたね。ミサイル問題など、日本も百パーセント平和で安全とは言えませんが、今後どのような社会にしていくのか、中学生の皆さんもその未来を創る担い手の大切な一人ですね。

★　奨励賞

「西の魔女が死んだ」を読んで

鴛泊中学校　二年　天内　陽向

このお話は、中学校へ入学して学校に行けなくなってしまった主人公のまいが一緒に暮らしていた西の魔女というおばあちゃんが死んでしまうお話です。

私がこの本を読んだ理由は、私もまいと同じように学校に行けなかった時期があったからです。

私がこの本を読んで心に残ったことは二つあります。

一つ目は、おばあちゃんの家での生活です。まいはおばあちゃんの家で自分で時間割を立てて、その時間割にそって生活をしたり、おばあちゃんの行動を見て、自分から手伝いをしています。時間割を立てる時も自分の苦手な勉強をいれていたり、お手伝いもおばあちゃんに声をかけられる前にしていました。でも、私は時間割を立てても、時間割通りの生活が出来ないと思います。また、まいがおばあちゃんの行動を見て自分からお手伝いをしていて、おばあちゃんの行動を見て自分に何が出来るのかを考えて行動していてすごいと思いました。私は、自分から仕事を見つけてお手伝いが出来ないので私もまいみたいに自分で仕事を見つけてお手伝いができるようになりたいと思いました。

二つ目に心に残ったのは、今まで一緒に暮らしていたおばあちゃんから離れてお母さんとお父さんと暮らし、まいが新しい学校に通うと決断する所です。ある時、学校に行けていなかったまいに今まで通っていた学校と違う学校に通う事をすすめました。まいはお父さんにこの事を言われた時、たくさん悩んでいました。前の学校で友達のグループに入れなかった事や次の学校がどんな所かおばあちゃんと離れる事などまいはたくさんの不安をかかえていました。まいは色々考えて最後に次の学校自分にとって、良い場所か悪い場所かは分からないけれど新しい学校に行ってみる価値はあるという考えからまいは新しい学校に行く事を決めました。私も前の学校から鴛泊中学校に来る時にたくさん悩みました。友達関係や勉強などたくさん悩みましたが私はたくさんの人に励まれて助けてもらい学校に通うことができました。まいもたくさんの人に助けられて学校通いを始めますがまいは私と違って一度も行ったことない学校に行くので私はそんなまいがすごいと思いました。

私は、この本を読んで、自分を助けてくれた人や家族とこれから離れて暮らすことになると思うから、まいみたいにおばあちゃんのお手伝いを自分からしたり勉強をたくさんして、私を助けてくれた人や家族、おじいちゃん、おばあちゃんに恩返しが出来るようにしたいです。

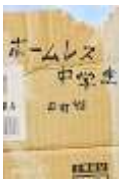
【講評】

読書の魅力がよく伝わってくる文章でした。本の登場人物と自分自身を比べることで、自分と同じ悩みの主人公に励まされたり、自分よりも勇気がある主人公に背中を押されたりした経験が書かれていて、それこそが読書の魅力のひとつだと私は思います。

★　奨励賞

「この本を読んで伝えたいこと」

鴛泊中学校　三年　髙橋　優羽



私は、この本を読み、人と人の支え合いについて改めて考えたいと思いました。私が読んだ「ホームレス中学生」という本は、あるお笑い芸人である田村少年の中学生の頃の実話の一冊です。この本は、人の温かさを知ることができる愛と絆のお話だと思います。

中学二年の一学期の始業式の日、十三歳の田村少年が家に帰ると、父親から「家族、解散」と言われた兄と姉と田村少年はバラバラになってしまった。田村少年は迷惑をかけまいと、一人で公園に寝泊まりすることになった。きっと私なら、自分一人では何もできないからと、兄姉に頼ってしまっていたと思います。その後、田村少年は友人に相談し、しばらく友人の家で暮らせることになりました。その家庭や先生、兄姉を通じて人の温かさを感じます。

田村少年の暮らしは、明日の食べるものがない。どんなに失望的だったか、想像するだけで私は胸が苦しくなります。私達はどれだけ恵まれた環境で生活しているのか、何の不自由なく暮らしているのか、改めて痛感しました。田村少年のように誰かと出会ったことによって、考えが百八十度変わるという経験をしてみたいと思いました。また、誰か一人でも多くの人の考えを変えられる人にもなりたいと思いました。

田村少年は、公園暮らしの時の気持ちをこう表しています。「大好きな人の気持ちを考えたら大抵のことは頑張れるし、踏み留まることができる。」この言葉はきっと幼くにして亡くした母のことを思い、頑張ってこれたんだな、と胸が苦しくなりました。

私はこの本を読んで伝えたいことは、「人は支えがあり、生きている」ということです。決して、一人では生きていけません。誰かに支えられること、誰かを支えることで、人は成長し、初めて強くなったと気づきます。田村少年の友人、その家族、学校の先生たち、近所の方々、そして、何よりも立派な兄と姉の支えがあって田村少年の今があります。過酷な生活を周りの人たちに支えられて成長していく田村少年に姿にとても感動しました。生きていくのにとっても必死で一生懸命頑張っている姿を想像すると、心が苦しくなります。

家族や友人、大切な人、沢山の人との支え合いがあり、私達は生きています。田村少年を兄や姉、沢山の人が支えてくれたように、誰かを支え、また、誰かを支えてくれる。人の支え合いとはとても素敵なものなのです。

最後に、この作品を読んで、こんなにも一生懸命生きている人がいたことに驚きを隠せませんでした。自分がどんなに幸せな生活をしているのか、実感することができました。私は田村少年のように「誰かからの支え」に感謝し、また、自分が支える側にもなれるように今後、生活していきたいです。

【講評】

私たちは、たくさんの人に支えられて毎日を生きています。そんな「当たり前だけど、普段意識しないこと」に気づかせてくれる感想文でした。最後、逆の立場から「自分が支える側にもなれるように」と締めくくった構成も見事でした。

★ 奨励賞

「聲の形」を読んで

鬼脇中学校　二年　河越　苺夏

障がいを持った人達は、普段の生活で何を感じて、そして何を考えて生きているのでしょうか。

この本に出てくる西宮硝子という女の子は耳の障がいをもっていて、耳が聞こえません。

なので、家族や友達といる時は手話やノートなどを使って会話しています。

もし、私がこの子の立場だったら前向きには生きていけないと思います。自分に障がいがあるのに友達と遊んだりすることは、きっと出来ないと思います。なぜなら、話がかみ合わなかったり、会話がとぎれるのがこわいからです。

では、逆に友達が障がい者だったらどのように接するでしょうか。

この本の主人公は、西宮硝子が障がい者であるということをおもしろがって、いじめや差別をしていました。

私だったら、主人公のようにおもしろがったりいじめたりはしないと思いますが、現実を理解するのに時間がかかってしまうと思います。

私は障がいをもった友達が周りにいないので、今まではこのように深く考えたことがありませんでした。

ですが、この本を読んで障がい者の方の気持ちやそんな方たちを周りで支えている家族、友達の気持ちを少し理解することができました。

現在、障がい者差別やいじめなどが世の中で問題になってきています。

その人達は、障がいというもののつらさやいたみ、悲しみをわかっていないからそんなことができるのだと思います。

私は、障がいについてしっかりと学んで、理解して生きていくのが大切だと思います。

私は、改めて障がい者とのあいだにできる壁などを学びたいと思いました。

みなさんも、しっかり人の気持ちを考えて行動していきましょう。

【講評】

この本を通して考えたことがまっすぐに伝わってくる感想文でした。知らないことをそのままにしたり勝手に解釈したりするのではなく、学んで理解していくことは大切ですね。来年は日本でパラリンピックが開催されます。障がいを持つ方々の活躍をたくさん目にすることで、障がいへの理解を深める一歩にしてみてください。

『審査を終えて』

第三十三回読書感想文コンクール審査委員長

鷲泊小学校　大石　昂卓

近年、１年間で出版される本の冊数は７万～８万冊と言われています。つまり、１日に約２００冊の本が新しく出版されているという状況です。数え切れないくらいあるたくさんの本から本当に心を動かされる本に出会うことは難しいかもしれませんが、たった１冊の本との出会いで考え方、感じ方が変わることがあるように、素敵な本との出会いは読む人の心を豊かにし、教養を深めてくれると思います。読書感想文や学校での読書タイムなどを通して子どもたちが本とふれあう機会を増やしていただけたらと思います。

人生の中で最初の本との出会いの多くは両親(または祖父母)の読み聞かせではないでしょうか。内容を覚えているほどに読み込んでいるにもかかわらず、何度も読んでもらい、読むたびに新しい驚きや喜びと出会い、物語にのめり込んだことだという経験をした人も少なくないのではないでしょうか。私は、読書感想文はそういった思いに形を与えるものだと思っています。そのためには日頃から本にふれることがとても大切だと思います。“読書感想文だから読まなくちゃ”、“この本すすめられたから”では、なかなか本に書いてあることを素直に受け止めることはできません。日常の中で本と関わり、その本について『この本楽しかったよ!』と家族や友達と共有する経験があると、読書感想文に対しての苦手意識が少し和らぐのかもしれません。今回受賞した作品は、本からのメッセージを自分なりに受け取り、自分を文章で表現しているものを選んでいます。自分だったらどう考えるだろうか、自分だったらこうしたいなぁなど読書を通しての思いが形になっており、楽しく審査をすることができました。

今、子どもたちの周りには動画共有サイトやSNS、ネットゲームなど様々な娯楽があふれています。そんな時代だからこそ、読書を通して深く自分と向き合い、様々な疑似体験を体験する事は子どもたちにとって大きな財産になると思います。来年もたくさんの感想文に出会えることを楽しみにしています。

【第三十三回　読書感想文応募校と応募数】

■小学校一学年の部
鴛小　五点
利小　六点

■小学校二学年の部
鴛小　三点
利小　三点

■小学校三学年の部
鴛小　十一点
利小　三点

■小学校四学年の部
鴛小　十六点
利小　五点

■小学校五学年の部
鴛小　十三点
利小　五点

■小学校六学年の部
鴛小　十七点
利小　三点

■中学校の部
鴛中　五十二点
鬼中　十四点

小学校計・・・　九十　点
中学校計・・・　六十六点
合　計・・・　百五十六点

【審査の先生】

鴛泊小学校・・・・・・・・大石昂卓先生
利尻小学校・・・・・・・・伊藤慎也先生
鴛泊中学校・・・・・・・・小林裕子先生
鬼脇中学校・・・・・・・・野呂田大輔先生

● 令和元年度
第三十三回読書感想文コンクールを終えて

読書感想文コンクールに、応募していただいた小中の児童・生徒の皆さん、ご協力ありがとうございました。

また、各学校の校長先生はじめ諸先生方には、作品の取りまとめ、審査等、お忙しい中ご協力をいただきまして、厚くお礼申し上げます。

今後とも何かとご指導、ご協力の程、よろしくお願い申しあげます。

令和元年十二月発行
利尻富士町教育委員会　鬼脇公民館業務係

おかえり、栞の場所で待ってるよ

2019 第73回
読書週間標語